

320. 大谷コレクションの瓦（後編）

—近江の古代寺院研究の基礎資料9—

6. 時雨谷窯跡群の川原寺式軒丸瓦と須恵器

八日市市建部瓦屋寺町周辺には、前編で紹介したカマエ遺跡のほかにも、複数の古代瓦出土遺跡がある。当該地域の水源として重要な役割を果たしてきた吉住池遺跡や、官衙的な配置の掘立柱建物群が検出された上日吉遺跡がそれであり、この2遺跡から出土した軒瓦は神崎郡能登川町法堂寺廃寺や五個荘町金堂廃寺のそれとよく似る（滋賀県教委1979/図版15の4・5、1984/図版78の2、能登川町教委1999/P67図47～P

79図59、P91図68～P95図72、伊藤1992/P383の写91）。そして箕作山麓には時雨谷窯跡群と崩ヶ谷窯跡群といった瓦窯跡群もある。

時雨谷窯跡群は、昭和54年2月11日に大谷氏が発見した。遺跡の名称は所在地の小字「時雨谷」に由来するが、西田弘氏は瓦屋寺瓦窯跡群と呼び、大谷氏は通称地名によって油焼谷窯跡群と呼んでいる。箕作山東麓の瓦屋禅寺参道入口付近北側の南向き斜面に、西側から順に1号窯跡、2号窯跡が並んで位置し、さらにその上方斜面にももう1基があると推測されている。

1・2号窯跡は瓦陶兼業窯跡とみられる。大谷氏らが報告したその採集資料は（大谷・丸山1979、丸山1983、西田1989/P98写真206・P99写真217）、近江における

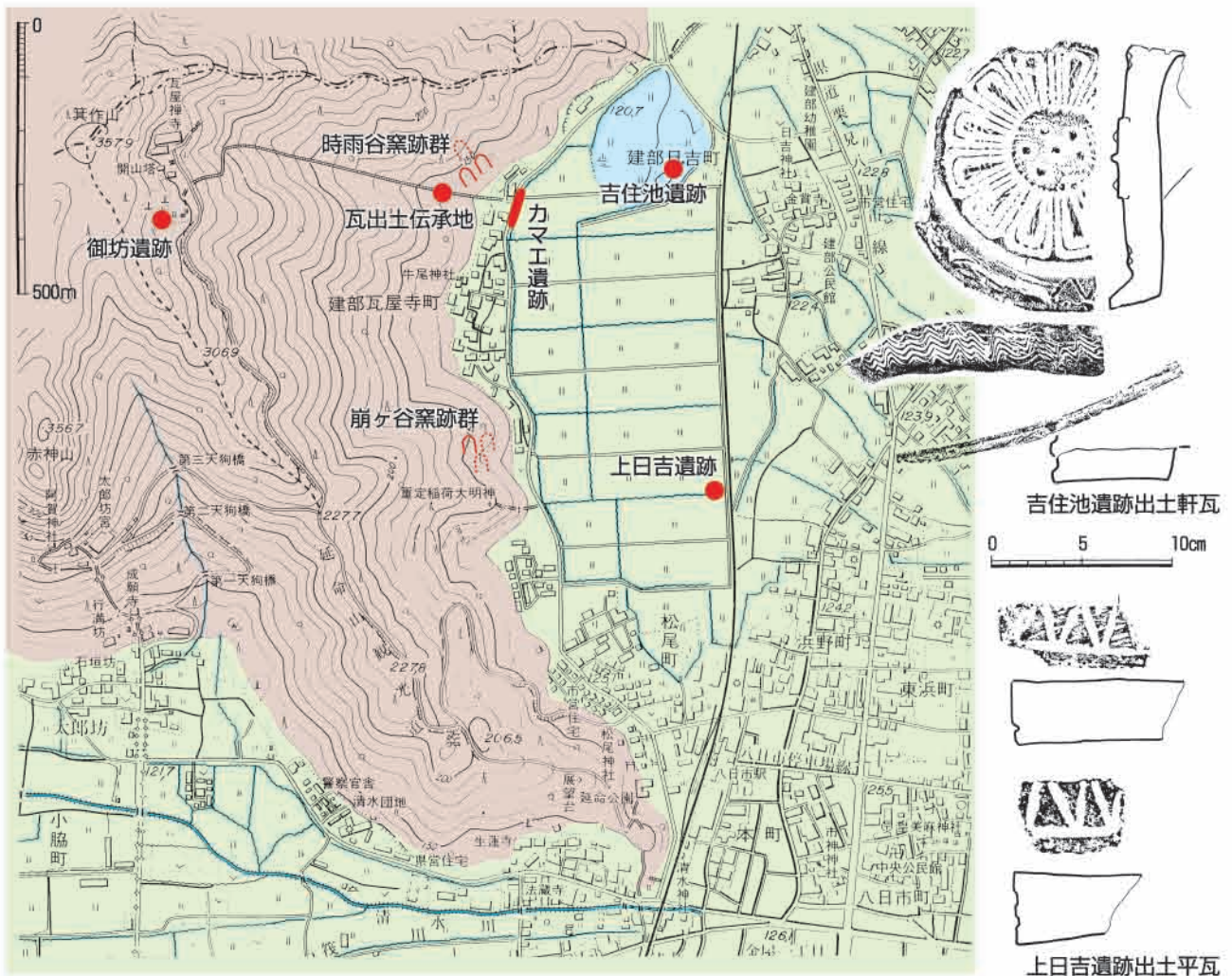


図9 瓦屋寺町周辺の古代瓦出土遺跡

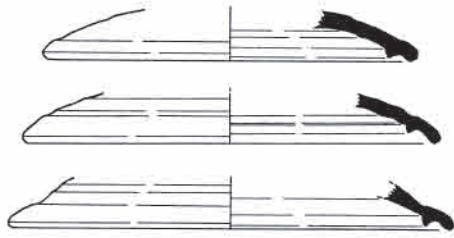


図10 時雨谷1号窯跡の須恵器

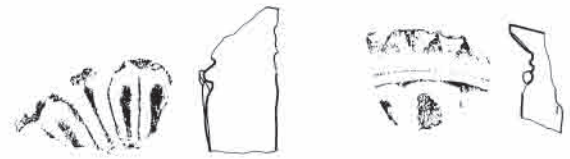


図11 時雨谷1号窯跡の川原寺式軒丸瓦
図12 時雨谷窯跡群の川原寺式軒丸瓦



図13 時雨谷2号窯跡の平瓦1 (凸面)

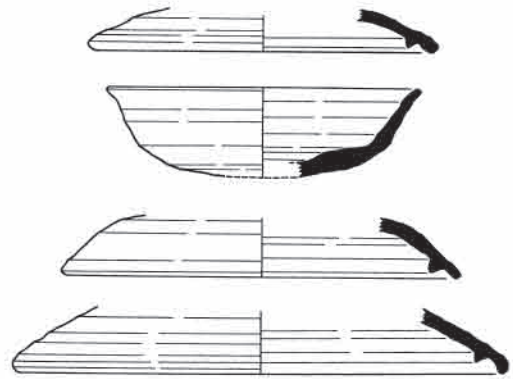


図14 時雨谷2号窯跡の須恵器



写真7 時雨谷2号窯跡の平瓦1 (凸面)



写真8 時雨谷2号窯跡の平瓦1 (凹面)



写真9 時雨谷2号窯跡の平瓦1 (凸面)



写真10 時雨谷2号窯跡の平瓦1 (凹面)

川原寺式軒丸瓦の年代を推定する手がかりとして重要である(北村2003)。ところがこれが報告された『文化財だよりNo25』(大谷・丸山1979/図1、2の2)と『八日市市史 第一巻 古代』(P685図42・43)とでは採集箇所の混乱が認められるうえ、すでにこの軒丸瓦等は大谷氏の手元を離れているらしい。大谷氏の最初の記録(大谷・丸山1979)を優先し、それに当時の写真等を加えて校合すると、図11の軒丸瓦と図10の須恵器とは昭和54年2月11日に1号窯跡から採集され、図14の須恵器は同年同月16日に2号窯跡から採集されたとみられる。図12の軒丸瓦については採集箇所の記録はないが、同年同月11日に時雨谷窯跡群で採集されたことはまちがいない。『八日市市史 第一巻 古代』P684写真40・41は、それらに同年同月11日以降の採集品を加えて撮影されたらしい。

軒丸瓦(図11・12)の瓦当紋様は複弁蓮華紋で、瓦当部と丸瓦部との接続は接合式である。図12は斜縁に面違鋸歯紋をめぐらせるものの、写真で見ると花卉には弁央界線がないらしい。川原寺式軒丸瓦としては瓦当紋様に退化傾向がうかがわれるが、須恵器から判断すると、いちおうは7世紀第4四半期の所産とみてよいだろう。

平瓦(図13、写真7～10)についても昭和54年2月11日に2号窯跡で採集した旨の注記があり、『文化財だよりNo25』でもそのように報告されている。したがって『八日市市史 第一巻 古代』が、平瓦1(図13・写真7・8)をP685写真43で示して崩ヶ谷窯跡からの出土と記すことは誤りであろう(後述)。

平瓦1の凹面には粘土板の合わせ目が観察できることから、桶巻き作りであるとわかる。しかし凸面に施された正格子の密な叩き締めは、広端側と狭端側とでは連続しない叩き締めの円弧が認められる。叩き板の原体は同一と見られることを考慮すると、やや不自然ながら、広端側は右手でもって、狭端側は左手でもって叩き締めた、いちおう考えておきたい。焼成はややあまく、色調は灰色を呈す。

平瓦2(写真9・10)の凸面には正格子叩きまばらに施され、それには叩き締めの円弧が認められる。粘土板桶巻き作り巻きとみてよいだろう。焼成はややあまく、色調は灰褐色を呈す。

7. 崩ヶ谷窯跡群の平瓦と切り隅平瓦

崩ヶ谷窯跡群は建部瓦屋寺町の集落南西側に所在する。時雨谷窯跡群から南側に約500mの南向きの山林斜面に位置する。2～3基はあるらしい。遺跡の名称は所在地の小字「崩ヶ谷」に由来するが、発見者の大谷氏は通称地名によって玉作窯跡群と呼んでいる。なお

『八日市市史 第一巻 古代』P685写真43の平瓦は『文化財だよりNo25』図2の1で示された時雨谷窯跡群の平瓦が誤って掲載されたとみられる。

写真11～14に示した平瓦と切り隅平瓦1は昭和56年1月1日に、写真15・16の切り隅平瓦2は同年2月25日に採集した旨の注記がある。平瓦(写真11・12)は凸面に正格子叩きをまばらに施し、それには叩き締めの円弧が認められる。粘土板桶巻き作りであろう。焼成はややあまく、色調は灰褐色を呈す。切り隅平瓦(写真13～16)は、側面の形状や凹面に分割凸帯痕があることから、粘土板桶巻き作りとみなされる。凸面には縄叩きを施し、それを横位のナデによりほぼ完全に消去している。凹面の布目も縦位ナデにより不完全ながら消去している。いずれも堅緻に焼成され、色調は青灰色を呈す。

崩ヶ谷窯跡群では粘土板桶巻き作り平瓦を焼成する。そしてそれには焼成前に加工した隅平瓦が含まれている。この切り隅平瓦は、必要な道具瓦の種類と数量が瓦生産段階で十分に把握されていたことを示唆している。建物の屋根構造に対応した高度に組織化されたこうした瓦生産は、7世紀第4四半期でもその後半を大きくさかのぼることはないだろう。なお吉住池遺跡でも切り隅平瓦1点が出土している(滋賀県教委1984/図版78の32)。

8. まとめ

「古瓦」の収集はふるい歴史をもち、江戸時代には拓本による『古瓦譜』が各地でつくられた。近江にも石山寺尊賢僧正の編んだ知足庵『古瓦譜』(林1982)などがある。「古瓦」収集の伝統は近代になっても連綿と受け継がれ、わが国における古代寺院研究の一流を形成した。そうしたなかで近江長浜の下郷伝兵衛コレクションは全国的にも有名であったらしいが(石田1970)、その内実はいまでも不明のまま、現在も個人コレクションの『瓦譜』が編まれつつある山城などは異なって(最近では星野・宇佐2004)、その学術的価値を評価しようとする気運に乏しい。

大谷氏の手元にある古代瓦の数量は、上述のコレクションとは比較にならないほど少ない。集めることを目的として成立したコレクションではないことが、その大きな理由であろうが、それには地域史研究にとっての重要資料が含まれている。「管理体制の整備された公的機関での保管」という、大谷氏の最終的な希望がかなう際、本稿が大谷コレクションの目録としての役割を果たせたなら幸いである。

2004年12月28日脱稿

(財団法人滋賀県文化財保護協会 北村圭弘)

引用・参考文献

石田茂作1970「古瓦研究の意義と名称」『飛鳥白鳳の古瓦』奈良国立博物館
伊藤唯真「古代寺院の展開」『五個荘町史 第1巻 古代・中世』五個荘町役場
大谷巖・丸山竜平1979「八日市市瓦屋寺町所在瓦屋寺瓦陶兼業窯址群について」『滋賀文化財だよりNo25』（財）滋賀県文化財保護協会
北村圭弘2003「琵琶湖東岸域の川原寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦作りVI』奈良文化財研究所
西田弘1989「近江古代寺院の古瓦文様」『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会
林博通1982「石山寺に蔵する『古瓦譜』およびその古

瓦について」『考古学雑誌 第67巻第4号』日本考古学会
星野猷二・宇佐晋一2004『器瓦録想』伏見城研究会・真陽社
丸山竜平1983『八日市市史 第一巻 古代』八日市市役所
滋賀県教育委員会1979『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ 2』
滋賀県教育委員会1984『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ 2』
能登川町教育委員会1999『能登川町埋蔵文化財発掘調査報告書47-2集』



写真11 崩ヶ谷窯跡の平瓦（凸面）



写真12 崩ヶ谷窯跡の平瓦（凹面）



写真13 崩ヶ谷窯跡の平瓦1（凸面）



写真14 崩ヶ谷窯跡の平瓦1（凹面）



写真15 崩ヶ谷窯跡の切り隅平瓦2（凸面）



写真16 崩ヶ谷窯跡の切り隅平瓦2（凹面）